

京都産業大学 ことばの科学研究センター 2024 年度第 2 回研究会

日時：2024 年 6 月 26 日（水）14:00～16:00

場所：4 号館 2 階 総合学術研究所

小津久足の文体—今古和漢雅俗一致—

菱岡憲司（山口県立大学国際文化学部教授）

江戸時代後期を生きた小津久足（おづ・ひさたり、1804-1858、号桂窓など）は、伊勢松坂の裕福な商人、歌人・紀行文作家、西荘文庫を成した蔵書家、馬琴と作品の評答をやりとりした友人など、多彩な顔を持ち、生涯に和歌は 7 万首、紀行文は 46 点を残している。そうした多面的な久足の文事を紹介しつつ、とくに自己表現の器とした詠歌と紀行文執筆について、歌論と紀行文論を参照して、久足が標榜した「今古和漢雅俗一致」という文体を確認し、時代に即した表現を模索した様子をうかがいたい。

無門の室内から麗末鮮初の禪林へ

——『蒙山法語』諺解への検討を通して——

杉山豊（ことばの科学研究センター員・外国語学部准教授）

『蒙山和尚法語略録（諺解）』（1459～1461 成書か）は、南宋末元初の臨済宗楊岐派の禪僧、蒙山徳異（1231～？）の法語集に、朝鮮語による譯解を施した文獻であり、朝鮮初の學僧、慧覺尊者信眉（1405？～1480？）の手になる。先行研究の夙に指摘する如く、該書には、白話への没理解に基づくと思はれる誤譯が隨處に見られる。本發表では、これまで誤譯と解せられてきた一事例について、‘誤譯’の現れる文脈に注目して再検討する。さうして、これが信眉が意を以て下した、‘確信犯的’措辭であつた可能性を示す。加へて、近代以前の朝鮮において流布の痕跡の認められない『無門關』との影響關係についても、問題を提起する。